

社会変動と社会化

本田 時雄

On the Socialization in Social Changes.

Tokio Honda

我々人間は、社会的動物といわれているように、一般には家族などと一緒に生活している。2人以上の相互作用のある集まりは集団であり、広義の社会である。人間は社会の中で社会の「きまり」にしたがって生きており、場合によっては自分たちで「きまり」を作って生きていくといえよう。このようなプロセスは社会化と呼ばれている。ところで、この社会化は社会や時代によって変化することがしばしばあり、社会変動のためにかなりのエネルギーが社会化に費やされてきた。

1 社会化

一定の遺伝素質を持った、きわめて大きな行動の可塑性のある個々人が、ある集団で有用な成員になるためには、その集団や文化や規範にしたがって、そこで必要とされる慣習的な受容可能な狭い範囲の知識や技能、態度、価値、動機、行動を漸次獲得して、その社会集団において一定の許容範囲内の行動様式を示すようにならなければならないが、そのようなプロセスが社会化と呼ばれている。社会化は個人と社会の両方のレベルで進行する。前者のレベルでの社会化は個人的学習と呼ばれるが、後天的経験や選択的学習、偶然的学習によって許容範囲内の行動様式が学習され、個人差が見られる。後者の社会レベルの

ものは、文化的伝達と呼ばれ、さまざまなタイプの行動が世代から世代へと受け継がれていく側面である。個々人がそれぞれの発達段階で習得することの望ましい課題は発達課題と呼ばれ、社会化は発達段階を達成していくプロセス～人間形成のプロセスとも考えられている。

教育社会学者、柴野昌山 [1978] によれば、社会学などでの多くの社会化論は社会本位で、社会的価値の内面化に力点を置いており、成員の自己実現的側面を見逃す傾向があるという。すなわち、社会化は、人間の社会的形成力として作用することを通して、社会そのものの維持・存続・発展をはかる営みである。ここに社会統制が介在する。社会および集団が秩序を維持するために、いろいろな正と負のサンクションがある。同調を促進させるのに奨励したり、報酬を与え、また逸脱を阻止するのに禁止や懲罰によって制裁する。

(統制が厳しすぎると、公然と抵抗が起こる場合とタテマエとホンネとの分離が生じる場合がある。)

これに対して、ブリムら [Brim & Wheeler, 1966] は社会化の要求を自己流の社会化へと転化させるプロセスである「自己創発的社会化」を挙げている。また「孤独な群衆」で名高いリースマン [Riesman, D. 1953] は、社会変動

と社会的性格に言及して「概して社会の有する行動上のノルムに適合させる能力～アンノミック型の人間に通常不足するもの～をもつが、しかし適合するか否かに関する選択の自由をもつ人間」である「自主型」を例示して、個人の主体性や自己実現の可能性を述べている。その最も卑近な例としては予期的社会化 (anticipatory socialization) がある。これは、ある個人がそれまで属していた社会・文化と異なる社会・文化へ自ら移動する場合に (留学、海外勤務、他の階層への社会移動など)、自分が将来所属したい、あるいは所属するであろう社会や集団の規範、文化、役割などをあらかじめ学習することである。(自己教育に通じるところがある。)

なお、橋爪貞雄 [1978] は、「社会化」という概念が従来の「学習」や「教育」と別に用いられるようになった背景として次の3つを挙げている；①最近の急激な社会変動、②社会構造の変化から生じる各種の問題状況、③行動科学等、学際的研究の発展。また社会化に近似した概念に教育、しつけ、役割などがあるが、社会化、教育およびしつけの3者の関係について、社会学者、松原治郎 [1976] が図1のように分かりやすくまとめている；役割は社会化の最も主要な概念の1つで、個々人の性別、発達段階、社会的地位などに応じて社会的に期待され要請される行動パターンである。役割学習は、直接的学習や社会的学習とともに社会化の基本的なメカニズムの1つである。

社会化のプロセスについては次のようにまとめられている；一定の遺伝素質と生理的要求をもって生まれてくる子どもは、成長するにつれて、感覚的・認知的・社会的行動のさまざまな側面を、家庭での両親の養育態度・しつけなどを通じて、幼稚園・保育園、学校などの諸機関・施設・制度とのかかわりにおけるいろいろな対人関係の中で、さらにはマス・メディアとの接触を通じてしだいに学習

し、発達させていく。その学習は選択的学習で、個々人の独自性と各自のおかれた環境的条件の差異などと相まって、各人は一定許容範囲内でそれぞれ独特の技能、興味、態度などを習得していく。

教育学者、木原健太郎 [1976] は、人間形成と社会構造の変化との関係について次のように記している；「人間形成の目標と形成の様式には、社会構造によって規定される面がある。そもそも、個人における社会的行動の様式は、彼が生きている同時代の社会構造からインパクト (impact 衝撃) を免れることができない。また、個人は、現在から将来にかけての可能的な行動 (possible behavior) において、社会構造に対して、逆にインパクトを与えることができる。人間形成は、こうした個人対社会の関係視座にあって、個人に対して意図的に、また無意図的に果たされる何らかの社会的機能である。『形成』の主体者、すなわち形成する者は、社会構造からインパクトを受ける。しかしながら、この、インパクトを受けた者が誰であるか、それは時と場合によるから、かならずしも分明ではない。ただ、明らかなことは、この人間形成が、社会構造が変化するに伴って、その様式とともに、志向性をも変えてくるということである。とくに、社会構造の基礎構造としての経済的メカニズムの変化にしたがって、人間形成の指向性は変化してくる。ちなみに、ここでいう経済的メカニズムという概念は、広い意味での社会構造を規定しながら、しかも広義の『社会構造』に包みこまれる一つの操作概念である。」ここでの論議は、「人間形成」を「社会化」に置き換えれば、「社会化」にそのまま当てはまることである。

世の中が平穏無事で、生活にも変動が少ない社会では、社会化は成人に達するまでに一度なされれば良いプロセスと一般に考えられていた。社会的分化が小さく、社会移動の少ない伝統的な社会においては、社会化は継

承されたモデルにしたが行われた。そこには世代的非連続はない。斉藤耕二 [1974] が問題とした3つの次元（責任ある地位役割—無責任な地位役割、支配—服従、対照的な性役割）は、その社会の文化によって規定されているので、連続であったり非連続であったり、まちまちであった。しかし、次に述べるような社会変動の激しい時代では、一般に世代的非連続性は強くなり（麻生誠ら [1978]によれば、剰余生産物が溢れるような社会においてそうである）、3つの次元の非連続性は弱まると考えられる。戦争や大恐慌、あるいは現代のように寿命が40年間に約30歳も伸びたり、急速なしかも不断の技術革新、交通や通信のメディアの飛躍的な発展による国際交流の波は新しいタイプの社会化を必要としている。そして社会変動は程度の差こそあれ、望ましい行動規範の何らかの変更をもたらすが、モデルとなるべきものが殆どなく、また社会化の目標も明確でない場合が多い。今日の社会変動は、戦争や大恐慌のように全体社会を直撃こそしないものの、変動は恒常的である。このような社会では、成人や老人にもまさに一生涯にわたって社会化または再社会化 (resocialization) が要求されている。ここに「生涯教育論」が登場する。提唱者ラングラン [Langrand, P. 1965] の挙げる、生涯教育の必要な理由は次の9箇条である；①人間の理想・習慣・概念の加速度的変化、②人口の増加と平均寿命の伸びが教育の量的拡大のみならず、質的变化をもたらしていること、③科学技術の進歩と産業—職業構造の変化、④政治の変動、⑤マス・メディアの発達と情報を処理する能力の必要性の増大、⑥余暇の増大と活用、⑦生活様式と人間関係の危機、⑧現代人の精神と肉体のアンバランス、⑨イデオロギーの危機におけるアイデンティティの混乱、それにとともなう人間の尊厳と自由を守る責任である。

一般に集団は何らかの目的を持っており、

これを達成するためにふさわしい行動様式を成員に要求するので、社会化は個人の水準であれ社会の水準であれ、どの水準においても社会が関係しており、しかも子どもは全体社会のエージェントによって他律的に社会化される。したがって社会化される者の個人的要因よりも社会規範やエージェントなどの環境要因のウェイトは大きい。佐藤カツコ [1970] によれば、家庭における社会化に関する社会学的立場からの実証的アプローチは2つに大別される；①子どものパーソナリティに内在化された制度的価値に注目して、どのような価値が個々の家族において内面化されるか ②社会化がいかにして行われるかという過程を問題にする方向。①から社会の価値が変動すれば、それは直ちに社会化に影響することが推測される。社会体制が変われば社会規範やエージェントが変化し、社会化も異なってくるし、たとえ政権は変わらなくても経済変動があれば社会化に変化が生じるのは当然である。そこでまず問われるのは社会変動や内面化すべき社会規範とそのエージェントの存在状況であろう。

次に社会変動について見てみよう。

2 社会変動

社会変動は、社会学者、富永健一 [1965] やスメルサー [Smelser, N. J. 1968]、安藤・梅沢 [1981]、蓮見音彦 [1987]などを参考にしてまとめると、次のようである。社会の政治・経済・文化などの構造や人々の価値・信念体系、さらには行動様式を含む社会構造の全部または一部が変動することである。社会は人々の欲求充足と、環境に対する適応的存続という基本的な機能的要件を満たすように構造化されているが、社会構造に作用する種々の外的要因が変化したり、社会構造のさまざまな構成要素がそれぞれ特有の変化率を持ち、先導と遅滞が生じたり、構成要素の間に固有な両立しがたいものが顕在化することによって社

会構造が不整合になる。これにたいして各種の社会統制が作用するが、不整合がある限度を越えると、社会の基本的な機能的要件が充足しがたい状態になる。その際既存の構造を変えることによって整合化し、再び機能的要件を充足するようになるか、充足されないまま解体するか、いずれかである。通常は旧構造の解体と新構造の形成が同時に進行するという過程で、社会変動が生じる。社会変動を引き起こす外的要因は、自然的・生態学的环境、人口・技術・資源などの変化、外部社会のインパクト、文化と個性の多様性など、多次的である。狭義には体制的あるいは制度的な構造変化をさすが、目まぐるしい変化が社会の多角的な諸要因と複雑に絡み合っている生じるので、あらゆる社会生活の局面～たとえば政治、経済、(地域)社会、宗教、文化、道徳、技術革新～の変動をも含むと考えられる。

すなわち具体的に戦争(敗戦)、革命など体制を根底から覆すものから、政治形態はあまり変らないが、不況、産業構造の変化や価値の多様化に伴うもの～現代においては高度産業化、余暇社会、情報化社会、技術革新や都市化現象～まで挙げられよう。たとえば日比行一ら [1976] は社会移動、地域変動、情報化、経済変動、文化変動などを挙げ、教育との関係を論じている。特に成人期の社会化は高度産業社会、余暇社会などと都市化現象に深く関係しており、野島正也 [1983] は、成人期の社会化の課題として；①生産や消費の場で必要とされる知識・技術の陳腐化を防ぎ、新しい情報を取り入れて労働力の保全を図ること、②家庭や地域にある当面の問題を単独または他者との協働で解決に導くこと、③現代と将来のために、豊かで個性的な余暇生活の設計と実践能力を高め、より高い水準で自己実現をはかること、の3つを挙げている。

以上社会変動を概念的に見てきたが、日本の場合明治から現在までの約120年間は社会変動の連続であった。特に第2次世界大戦の

敗戦を機にする社会変動は混乱・動乱と呼んでしかるべきかもしれない。

明治時代以前の社会化は、生活空間が狭く、交通・通信の機関や手段が未発達のため、特定の地域ごとに、しかも身分ごとに行われていた。庶民の子どもの社会化(しつけ)は、「7歳までは神のウチ」などといわれ、「子が育つのは自然のこと故、自然にまかす」のが一般であり、長じて若者組や若者宿というムラの組織に参加し、祭り、遊び、共同作業を通じて社会化されて一人前のムラの構成員となっていた。また町人や武士は寺子屋や藩校などでも社会化された。

明治政府ができると、中央集権国家を目指し、富国強兵の思想、武士階級の儒教的な家父長制秩序(特に女性には三従の教えや良妻賢母の思想)を国民全体に法律や教育を通じて浸透させた。そして学校教育によって国家有為の徒を育成した。同時に政府は外国の侮りを受けないように、欧化に懸命になって鹿鳴館を造ったり、津田梅子らをアメリカへ留学させた。

第2次世界大戦中は、「国民は天皇の赤子である」とか、それまで等閑視していた母や妻を「軍神の母・妻」などと持ち上げた。また中学生や女学生も勉強するよりも労働力として徴用された。「ぜい沢は敵」と言われ、国策に従わないと「非国民」と呼ばれて迫害された。このころは内容の是非は別として、社会化の方針はいたって明快で、また家庭、学校、地域の三者が連携して子どもや、地域住民の社会化を行っていた。

約40年前の1945年、連合国に無条件降伏した我が国では、昨日の敵は今日の支配者であり、禁止されていた英語が解禁になり、もてはやされた。昨日の非国民は今日の愛国者であり、英雄にさえなった。帝国主義社会から民主主義社会へ移行し、自由、平等が叫ばれた。したがって、学校ではそれまで使っていた教科書の不都合な箇所を墨で黒く塗り潰した。それ

までの欽定憲法は廃止されて新しい憲法が制定され、民法も改正された。家庭では、イエ制度が否定されたので、戸主であった父親や跡継ぎと目されていた長男の座はきわめて軽くなり、核家族化が始まった。また時代の風潮としては物資欠乏の苦しみの反動や、日本の精神主義がアメリカの物量に破れたという思いからモノ主義にばく進した。これが1950年の朝鮮特需をステップストーンとして神武景気(1956)、(1958年のなべ底景気を経て)岩戸景気(1959～61)、いざなぎ景気(1966～70)などの高度経済成長をもたらした。「使い捨て時代」とか「消費は美德」という流行語ができたのもこの頃である。その後オイルショックが1973年に始まった。

社会化の男女差に関しては、女性が、男性以上に社会変動によって著しい影響を受けた。すなわち「男女7歳にして席を同じうせず」というような儒教的道徳は、戦後男女平等・同権の思想にとって代わられた。さらに1960年代後半からの世界的なウーマンリブのうねりの中から「国際婦人年」(1975)とこれに続く「国際婦人の10年」(1976～85)が生まれ、「婦人差別撤廃条約」が批准されて、「男女雇用機会均等法」も施行された。また家庭科の男女共学・共修も実施率がかなり高まってきた。したがって、女子の高等教育進学者が約35%にも達し(ただし短大が多い)、働く女性も増加している。また戦前には三下り半(離縁状)は男性が書くものと相場が決まっていたが、最近では女性からの離婚申し立てが増加している。このような状況下では「男だから～」とか「女のくせに～」というようなしつけ(社会化)は通用しなくなりつつある。

図2は、時代における結婚相手の条件の推移を示したものである(川浦康至、1981)。「性格」を第1位に挙げるコーホートが多く、結婚前においては未婚の1946～52年生まれコーホートの「気があう」以外、全コーホートが

そうであった。結婚後での回想において、1926～34年生まれコーホートが「健康」を1位に挙げているのは戦後の混乱期に結婚したことが大きな要因であろう。このコーホートの結婚後と1935～45年生まれコーホートの結婚前後で第3位に「経済力」が入っていたのも混乱期を反映している。また豊かな時代になるにつれて「気があう」というような主観的・非物質的な条件が重視されはじめたと考えられる。

時代の流れが速く、しかも方向が明確でない社会では、将来を見通した社会化は行われにくい。現代の日本社会は絶えず部分的に変化しており、たとえ全体社会が変動しなくても、社会化すべき事柄が不明瞭で、同一視したりモデリングしたりする対象が見つけにくく、社会化は困難である。

3 大恐慌の場合

ここでは戦争、革命について大きな社会変動である経済的変動、大恐慌について述べよう。大恐慌に関しては、近年大恐慌が再来するのではないかという懸念があちこちで表明され、書物も刊行されている。現に昨年(1987年)10月19日アメリカで株の大暴落がおこって、その波及が我が国やヨーロッパ諸国に達しているので、ここではエルダー[Elder 1974]の「大恐慌の子どもたち(Children of the Great Depression)」を取り上げよう。この書物は、1929年に起こった大恐慌を経験した1920～21年生れコーホートの男女とその親たち150組を1931～64年の30年余、100回以上の面接や調査を行って追跡し、大恐慌の影響を探究したものである。分析の主な枠組みは、コーホート、ライフコースの他に、社会階級、性差、経済剥奪(35%以上の減収)の有無などであった。

1929年10月、ニューヨーク株式取引所での株の大暴落を契機として世界大恐慌は生じた。アメリカはもとよりドイツ、イギリスそして

日本でも深刻な不景気に見舞われて職がなくなり、生活は著しく苦しくなった。このような苦境に陥った場合に、どのような社会化が行われたのであろうか。主要なものを以下に列挙した。

1；家庭～a. 深刻な物不足や貧困を味わったのは下層階級で、中流階級は地位や名声を失ったり、そのようなことを心配し、世間体を保とうとした。

b. 高収入の見込みのある仕事よりも、安定性、親であることの責任性、家庭生活などを重視した。

c. 父親の魅力は低下し、母親の方は相対的に上昇した（両親間での地位の葛藤や不満、両親モデルの変化）。

d. 親のモラルの崩壊という荒廃状態を経験した子どもは恐れ、信頼の喪失、服従、マゾヒズムの傾向があり、意気消沈が持続した。

e. 父親は、子どもを挫折感と欲求不満のはけ口とし、怒鳴り、けなし、監視した。他方、剥奪中流階級の母親は、面接で、不満、疲労、不適切感、安心感欠如を示した。

f. 中流階級は、労働者階級に比して経済的優位さのみならず、問題解決のより広い経験や技術、より大きな情緒的支持を子どもに与えた。

g. 中級階級の子どもは、明るく、野心的な目標を持ち、問題解決により大きな支持を受けた。そして男子は教育・職業を通じて、女子は結婚を通じて目標達成を計った。

2；子どもの認知～a. 両階級とも剥奪家族は不幸である（特に中流階級のほうが強い）。これは中流階級の場合、威信の喪失から、労働者階級は経済喪失からであった。

b. 「父親がもっと幸福であってほしい」という願望は、父親が失業中で、経済損失の激しい家族の子どもに多かった。

c. 母親の父親を恥ずかしいと思う気持ちは子どもに影響し、そのような子どもは、青年期を通じて父親の地位や家族の地位を容認し

なければならぬような状況を避けようとした。

d. 剥奪家族の子どもは、周囲からの評価を実際よりも低く考える傾向が大きかった。

e. 娘は、「子どもたちのために私は犠牲になった」という母親の殉教者コンプレックスを明確に意識化できたとき成人期に入った。

3；新しい家計維持の方法～a. 母親や年長の子どもの収入を求め（母親の就業、少年のパート就労）、娘が家事を手助けた。また欲求や消費を縮小し、品物やサービス（家庭菜園、缶詰づくり、洋服の仕立て・洗濯）を自給自足した。これによって勤勉さ、秩序、他人の権利や考えを考慮するなどの習慣や、家族全体の利益のために自分の活動をそれに従わせるという基本的な習慣が得られた。

b. 少女の場合、中流階級の剥奪家族で3分の2の娘が家事よりも仕事を好んだが、実際に家事を手伝っていた割合はそれほど少なかった。労働者階級では、剥奪に関係なく、また実際の家事手伝いにもほとんど関係なく、約3分の2が仕事よりも家庭生活を選んだ。

4；成人期の経験の低年齢化～a. 剥奪労働階級の子どもは就労する傾向が強く、また早く大人に成り上がり、親の代理としてあるいは一人前として認められたがっていた。これは家族の困窮と密接に関連していた。

b. 家族の拘束からの早期解放や信用を望ましい特性と考え、金銭の扱いに熟練する傾向が強かった。

5；金銭に関する判断～a. 30年代の困窮を体験し、お金はそう簡単には手に入らないということを実感して、金を使うのは控え目に、特に自分の収入不相応に使うのをためらうようになった。

b. 経済的責任感があると認められたのは、定期的に小遣いを貰っている者と、就労している者であった。

c. 貯蓄している男性は、1933年当時、剥奪家庭に育ち、就業経験があり、金銭的責任感がありと判定された。特に就業経験のある者

は顕著であった。

d. 女性の場合、3要因ともに無関係だった。

6；信用と勤勉さ～a. 勤勉さは仕事をもっている少年が最高で、剝奪も関係した。彼らは学校・家族・友人関係に必要なものを買うために精力的に働いた。

b. 少女の場合、家事と収入のある仕事をしているものは信用も勤勉さも高かった。

c. 信用を高く評価した男性は剝奪家族で育ち、大部分10代で仕事をもっていた。しかし女性の場合には明確でなかった。

7；交際面での自立と家事～a. 週末の夜における異性を含むグループ交際は、剝奪家族で家事手伝いと仕事の両方をする少女の場合は少なく(特に労働者階級の)、自由時間については、剝奪労働者階級の少女が最少であった。

b. 少年(特に剝奪家族の)は学校での夜間活動に参加した。少女も同様。ただし高校生の場合、仕事を持った者が最多であった。

8；成人期～a. 恐慌下で育った親は、自分たちの経験したことを子どもに味わわせたくないようで、やや異常なほど豊かさを求めた。

b. 剝奪家族の男性は、母親が主要な役割を持つ家で育ったので、妻と一緒に意思決定をする友愛家族を指向した。

c. 健康、自我の強さ、衝動、競争心、個人的資源の利用の仕方などに関して、概して剝奪中流階級出身の者はプラス、剝奪労働者階級の者はマイナスであった。

また不況の30年代に成人となった親たちは、成人となった彼らの子どもよりも財産、所有者に価値を置き、職業生活で経済的利益を重視したが、豊かな時代の子どもたちは、職業選択で経済的要因をあまり重視せず、職業生活における伝統的誘因の価値を低下させた。これに関して時代変動の影響を3世代の女性の生き方を通じて見たヒル [Hill, R. 1970] によれば次のようであった；

①30歳前後で大恐慌の影響を受けた1907年生まれの女性は、晩婚で、バースコントロールの知識がなく、子どもを長期間にわたって短間隔で多人数産む。②1931年生まれの女性は、早婚でなく、子どもを最大間隔でしかも早く産み終える。したがって子どもの数は少ない。再就職し、収入が多いが、親や子どもに援助して3世代中、最も家を持つのが遅い。③朝鮮戦争後の1953年生まれの女性は、早婚で、短間隔で出産し、親世代よりも子どもが多い。

以上は大恐慌に遭遇した人びとの行動パターンであるが、社会化については、エルダーが「剝奪状態にある子どもの社会化にみられる多くの特徴は、子どもに将来の準備をさせる親の意図とあまり関係がないようで、むしろ家族が現実に必要なものに適応した結果であった。(中略)親の意図よりも家族の欲求を中心とした適応や構造的変化を考えるほうが妥当である。事実、このような適応は、子どもに対する親の計画や見通しのある社会化とは合致しなかったようだ。合致したのは、中流階級の剝奪家族出身の少女の場合であろう。」(P 337) また、「分業や権威のパターンで生じた変化は、生存という点からすると全体として恐慌時の家族に適したものであるが、結局は子どもの人生展望を妨害するものであった。つまり、危機状況において社会単位にとっては適合するものが、個々人の生活にも適合的であるとは限らないからだ。これから見るように、30年代の剝奪状況における社会化の環境や子どもに対する親の反応は、将来の生活予測よりもむしろ生きるための当面の要求と関連していたのである。」と記している。彼はその後、1928～1929年生まれの人々を調査し、比較した結果、大恐慌の影響は幼いほど大きいと結論づけている。ちなみに、佐藤 [1970] によれば、親の態度(方向づけ、評価、コントロール、肯定的・否定的反応)と子どもの認知のズレは、子どもの年齢が高

くなるにつれて縮まっていき、ズレの最も大きいのは父と息子の間で、最小なのは母と娘の間であった。さらにパーソンズ [Parsons, T., 1964] の「父親は道具的・手段的、母親は情緒的・表出的」に関して青年期以前の子どもの認知は逆であり、その理由として父親が社会化の初期に必要な「許容」や「支持」の情緒的段階に止どまってしまうからだと言う。

時代の流れ、社会変動が社会全体に浸透する場合、一般に遅滞が生じるが、自我関与が強く、かつホンネに近いもののほどその遅滞は小さい。また、社会変動のおよぼす影響の大きさと仕方が一人ひとり異なるのは当然であるが、ライフステージや社会階層によっても大まかに分かれる。社会環境に直接接している人々～成人は社会変動に直ちに影響されるが、子どもの場合は家族環境や学校、マス・メディアを通じて影響を被る。とりわけ家庭においては、人生に成功した（と思っている）親は子どもに自分と同じ人生行路を歩かそうとするが、失敗した（と思っている）親は子どもに自分とは違った行路を歩いてほしいと期待する。マス・メディアの影響に関しては、「現代においては活字やラジオに対する卑屈な態度があるために、そこに印刷された言葉、そこから流れ出す言葉は、各人の身をもって得た経験、各人が生活の中からつかみとった願望を押しつけて、その代りに、人間の内部を占拠するに至る。自分自身の経験および願望を楯にとって、マス・コミュニケーションが押しつける方法や価値に抵抗し続けるというのは、現代の人間の理想であっても、その現実ではない。」と清水幾太郎 [1972] が記しているし、また現にクーデターが起これとすぐに放送局やTV局を占拠することは常識となっている。これは、大衆の同調傾向を利用したものである。すなわち我々は一人ぼっちでは自信がなく寂しいので、周囲に類を求める傾向があり、社会変動の場合だけでなく、現代社会のように個々ばらばらに「隣は何を

する人ぞ」で生活している場合、手っ取り早く頼れるのはマスコミである。適切に受け入れるレディネスができていないと、「一億総白痴」にもなりかねない。

最後に、理想的には価値観や社会規範が単純かつ明快のほうが社会化は行われやすく、規範などが複雑多岐にわたる場合は困難になる。しかし、理想的とは言えない現代社会においては、戦時下や戒厳令下のように順守すべき規範や価値が堅固で融通性に欠ける場合よりも価値観が多様で、少しまとまりが無いように見える社会のほうが、社会化はたとえ困難であっても全体社会とそこに帰属する個々人にとって望ましいといえよう。

なお、付言すれば、社会変動の最大のものは戦争であるが、戦争が個人のライフコースにいかなる影響を与えたかというテーマの研究は、我が国では社会学者、Meguro, Y ら [1987] や朝日新聞社(編)のもの以外ないようである。戦争体験者が減少し、記憶もますます不確かになっていくので、この種の研究は緊急の課題であろう。

引用・参考文献

- 朝日新聞テーマ談話室・編 1987 戦争
上・下 朝日ソノラマ
- 麻生誠・柴野昌山(編) 1978 変革期の人間
形成——社会学的アプローチ アカデ
ミア出版会
- 安藤喜久男・梅沢孝(編著) 1981 現代社会
の変動論 新評論
- Bell, D. 1973 The Coming of Post-Indus-
trial Society. (内田・嘉治・城塚・
馬場・村上・谷嶋訳 1975 脱工業社
会の到来 上・下 ダイヤモンド社)
- Brim, O. g. Jr., & Wheeler, S. 1966 Social-
ization after Childhood. John Wiley.
- Elder, G. H. Jr. 1974 Children of the Great
Dpression: Social Change in Life
Experience. The Univ. of Chicago.

- (本田・川浦・伊藤・池田・田代訳 1986 大恐慌の子どもたち 明石書店)
- Elder, G. H. Jr. 1978 Historical Change in Patterns and Personality. In P. B. Baltes & O. G. Brim, Jr. (Eds), Life-span Development and Behavior, Vol. 2 Academic Press.
- Elder, G. H. Jr. 1980 Adolescence in Historical perspective. In J. Adelson (ed.), Handbook of Adolescent Psychology. John Wiley Sons.
- Glenn, N. D. 1977 Cohort Analysis. Beverly Hills. (藤田英典訳 1987 コーホート分析 朝倉書店)
- 橋爪貞雄 1978 社会化 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男 (編) 1987 教育学大事典
- 蓮見音彦 1987 今日の日本社会 蓮見音彦・山本英治・高橋明善 (編) 1987 日本の社会 1 変動する日本社会 東大出版
- 林茂樹 (編) 1979 生活変動と現代社会 中央大学出版部
- 日比行一・木原孝博 1976 社会変動と教育 現代教育社会学講座 2 東大出版
- Hill, R. 1970 Family Development in Three Generations. Cambridge, Mass. : Schenkman.
- 本田時雄 1981 女性の生活史を知る 女性の生活史研究会 (編) いま女性は 福村出版
- 川浦康至 1981 出会いから結婚へ 女性の生活史研究会 (編) いま女性は 福村出版
- 木原健太郎 1976 新しい人間形成論の展開 木原健太郎・松原治郎 (編) 現代教育社会学講座 3 現代社会の人間形成 東大出版
- 木原健太郎・松原治郎 1976 現代社会の人間形成 現代教育社会学講座 3 東大出版
- Lengrand, P. 1965 An Introduction to Life-long Education. London, Croom Helm and Paris, The Unesco Press. (波多野完治訳 1971 生涯教育入門 全日本社会教育連合会)
- 松原治郎 1976 教育と人間形成 木原健太郎・松原治郎 (編) 現代社会学講座 3 現代社会の人間形成 東大出版
- 松原治郎・佐藤カツコ 1976 しつけ 現代のエスプリ 113 至文堂
- Meguro, Y., & Elder, G. H. 1987 Children of War: Some Consequences of Growing Up in the Second World War, IX Biennial Meetings of International Society for the Study of Behavioural Development
- 森岡清美 1982 ライフコース的視点とその挑戦 家族研究年報, 8, 1-3.
- 森岡清美・青井和夫 (編著) 1985 ライフコースと世代 垣内出版
- 野島正也 1983 成人期の社会化 菊地幸子・仙崎武 (編) 人間形成の社会学 福村出版
- Parsons, T. 1964 Social Structure and Personality, The Free Press of Glencoe, A Division of The Macmillan Company (武田良三監訳 丹下隆一、清水英利、小尾健二、長田攻一、川越次郎 1973 社会構造とパーソナリティ 新泉社)
- Riesman, D., 1953 The Lonely Crowd—A Study of the Changing American Character, with R. Denny & N. Glazer. Yale Univ. Press. (佐々木徹郎・鈴木幸寿・谷田部文吉訳 1955 孤独なる群衆 みすず書房)
- 斉藤耕二・菊地彰夫編著 1974 ハンドブック 社会化の心理学 川島書店
- 斉藤耕二・菊地彰夫編著 1979 社会化の理論—人間形成の心理学 有斐閣

斉藤カツコ 1970 家族における子どもの社会化に関する一考察～ベールズの相互作用分析による親子関係の分析 教育社会学研究 25集

斉藤カツコ 1976 現代家族の訓育機能 木原健太郎・松原治郎(編)現代教育社会学講座3 現代社会の人間形成 東大出版

芝野昌山 1978 人間形成の分析視点 麻生誠・柴野昌山(編)変革期の人間形成

——社会学的アプローチ アカデミア出版会

清水幾太郎 1972 社会心理学 岩波書店

Smelser, N. J. 1968 Essays in Sociological Explanation. Prentice-Hall, Inc.

(橋本真訳 1974 変動の社会学 ミネルヴァ書房)

昭和史研究会 1984 昭和史事典 講談社

富永健一 1965 社会変動の理論 岩波書店

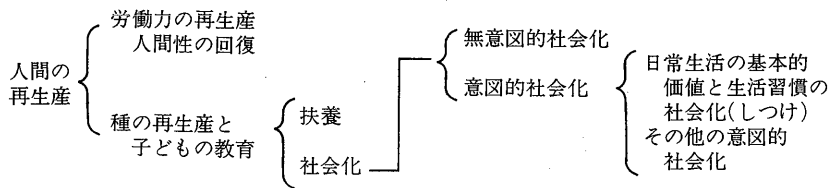
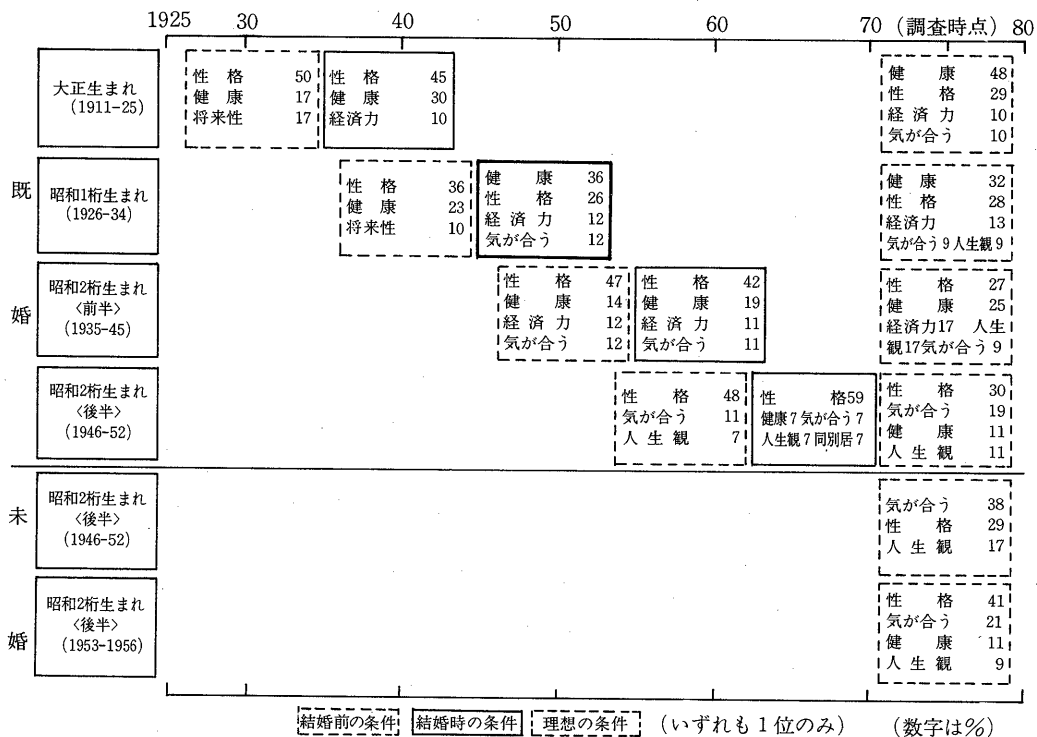


図1 教育、社会化としつけの関係



注) 選択該リスト 1.相手の経済力, 2.相手の性格, 3.性の満足, 4.相手の年齢, 5.相手の家柄, 6.気が合うかどうか, 8.親との同別居

注) 選択該リスト 1.相手の経済力, 2.相手の性格, 3.性の満足, 4.相手の年齢, 5.相手の家柄, 6.気が合うかどうか, 7.健康かどうか, 8.親との同別居, 9.身長容姿など, 10.趣味が合う, 11.相手の地位, 12.子ども好き, 13.相手の将来性, 14.相手の人生観, 15.その他

図2 結婚相手の条件の推移